

主が教えてくださった祈り

マタイ6章5～15節
2022年1月23日
松田 基子 師

イエス様は、山上の説教において、神様を信じ従う者の生き方を、教えて下さいましたが、その中心に祈る事を教えられました。それは、**信**仰生活の中心が祈りにあると言う事です。

ところで、創造主である神様を信じ、イエス・キリストを、自分の全存在の救い主と信じ、キリスト者となって、何が一番の変化であり、喜びでしょうか。それは、

『自分の創造主である、**真の神様に、祈る事が出来るようになった**』

と言うことです。信仰者にとって、祈りは欠かせません。イエス様の時代のユダヤ教でも、祈りは重視されました。会堂では、子供の頃から律法を教えられると共に、祈禱文による祈りの訓練がなされました。

日に3度、朝・午後・夕に、神殿の方向に向かって祈っていました。特に午後3時頃、神殿で犠牲が献げられる時刻にはどんな事をしていても、それを中断して、祈らなければなりません。当然、道の途中で、その時間となる事もありました。道で祈る事は何ら問題ではありません。しかし、中には5節に記されていますように、

「**人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる**」

人が居たのです。彼は何のためにそのような行動を取ったのでしょうか。彼は周りに信仰深い人として見られ、周りからの称賛が欲しかったに違いありません。

祈りは神様に向かって献げるべき、真心なのに、それを人々からの称賛を受ける手段にしたことで、イエス様から、

「**偽善者**」

と呼ばれています。しかし、人は誰でも、神様を見つめていないと、人の顔を見るのです。そうすると、神様に受け入れられるよりも、人々に受け入れられる事を選んでしまいます。そこ

では、神様とは全く繋がっていません。

それは**祈りではない**ことが明らかです。そのような誘惑に陥らないように、イエス様は弟子達に、「**あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる**」

と教えられました。岩波訳には、

「**戸を閉め**」が「**戸に鍵をし**」

となっています。外部から入って来られないように、完全に遮断する事が、求められています。

神様は、私たち人間をご自身との愛を築いて行く存在として、命と使命を与えて、世に送り出して下さっていますが、人はその使命を果たして行くためには、**神様だけに向き合って、神様の御心を聴く時を持たなければ成りません**。そうでなければ、自分勝手な生き方になって、使命を果たす事は出来ません。奥の部屋に入り、鍵を掛けるというのは、自分に絡みついている、人間関係を全て神様に捧げて、ただ、神様のみを主として、神様の**御心を聴く**事です。

神様は、私たちが心の奥に持っている、人には言えない、隠している罪の全てをご存知です。私たち自身も分からない、全てをご存知です。私たちはそういうお方との**真の**交わりなしに、人生の平安を得る事は出来ません。そのために、人間関係を断ち、隠れたところで、神様との**真実な**交わりを、持たなければなりません。イエス様は、祈りについて、
続いて7節で、

「**また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多いければ、聞き入れられると思ひ込んでいます。彼らのまねをしてはならない**」

と教えられました。

異邦人の祈り方と言うのは、多くの神々の名を呼んで、願い事をくどくどと繰り返し述べていた様です。しかし、当時のユダヤ人の祈りもまた、同じ様なことを見られました。彼らは先ず、申命記6章4節、5節の、

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽して、あなたの神、主を愛しなさい」

の聖句を唱え、次に18の祈りを唱えたのだそうですが、その冒頭では、19通りもの神様の呼び名を重ねて、神様への呼びかけとしていたのだそうです。

異邦人でなくても、ユダヤ人も形式にとらわれて、くどくどと述べ立てていたのです。それは神様が求めておられる姿ではありませんでした。そのような求め方をしなければ、祈りを聞いて下さらない神様ではありません。イエス様は、神様の人間に対する愛の御心をご存知でした。そこで、8節に、

「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」

と言われました。神様が求めておられるのは、神様に対する全幅の信頼です。

そこでイエス様は9節から、

『こう祈りなさい』

と神様への祈りの基本を教えられました。

後世に、主の祈りと呼ばれ、今日も共に祈られている、祈りです。まず、

「天におられるわたしたちの父よ」

と呼び掛けられています。ユダヤ教においても神様に対して、

「わたしたちの父よ」

と言う呼びかけが無かった訳ではありませんが、そこには厳しさが漂っていました。日に3度祈る祈りでも、19通りもの神様の尊厳を表す言葉を連ねて、神様に呼びかけました。そのように、ユダヤ人にとって、神様とは非常に恐れ多く、犯し難い存在でした。それに対して、イエス様は、神様に対して、

「アッバ」と呼びかけられました。

それは、愛に溢れた、家庭で子供が、父親に全信頼して、呼び掛ける、

「お父さん」

と言う呼び掛けの言葉でした。

イエス様は、ご自身の一番の苦悩であった、十字架へ向かわれる、ゲツセマネの園での祈り

に於いて、マルコ14章36節で、

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります」

と呼び掛けておられます。イエス様の祈りは、父なる神様に対して、幼子のように、愛に溢れた父親に全信頼して、

『お父さん、あなたは、何でもお出来になります』

との確信をもって祈られる祈りでした。

その神様の愛が、弟子達にも分かるように、

「天におられるわたしたちの父よ」

と呼び掛ける事を教えられました。

しかし、ここで大事な事は、神様に全信頼するという事は、神様に自分の願いを押しつけて、神様を、自分の願望実現の為に利用する事ではありません。神様こそ、世界の真の主権者であられ、人間は、その神様の愛の御心に従ってこそ、幸いを得ることが出来るのです。そこで、人間が先ず、神様に祈るべき言葉は、

「御名が崇められますように」

と言う祈りです。名と言うのは、

「誰々さん」

と名前を聞いただけで、その人の、人となり、思い浮かびます。そのように、名前はその人の存在そのものを表します。

『御名が崇められるように』

とは、神様を、心から敬い、神様の偉大さ、素晴らしさを誉め讃える事です。

ですが、岩波訳では、

「あなたの名が、聖なるものとされますように」

と訳されています。

神様の御性質は愛であり、聖であり、義なる方です。それに比べ私たち人間は、偽りの愛であり、罪に汚れ、本当の正しさが分からない、不義なる者です。そのような私たちは、本来、神様に対して、

『アッバ父よ、お父さん。』

などと、呼べる資格はありません。イエス様は、そんな罪深い人間、神様を呼ぶ資格の無い人間の罪を、神の御子の身体に、一身に負って下さり、身代わりの十字架に架かって、罪の贖いをして下さいました。

その事によって、人類の罪は赦され、イエス様を信じ、イエス様に結ばれて初めて、真に神の子とされるのです。そのことを弁える(わきまえる)ことなくして、なれなれしく、当たり前のように、

「お父さん」

と祈れるものではないのです。神様のご性質が、聖であられる事は、イスラエルを選ばれた、最初から、示されていました。レビ記19章2節に於いて、神様はイスラエルに、

「あなたたちは、聖なる者となりなさい。

あなたたちの神、主であるわたしは、

聖なる者である」

と命じられています。私たちは、本来、神様に背いて罪に汚れ、限りなく聖なる神様に、祈る資格もお父さん、と呼べる資格も無かった者であることを忘れてはなりません。その上で、神様を讃え、神様の聖さを尊び、そのお方を信じる者に相応しく聖さを求め、汚れた思い、行いによって聖名を汚す事が無いように、主の助けを求めつつ

「御名が崇められますように」

と、祈らなければなりません。

2番目の祈りは、

「御国が来ますように」

です。岩波訳では、

「あなたの王国が来ますように」

と訳されています。古代社会では、王が国を支配しました。王の支配のおよぶ所が、その国の範囲でした。ですから、王国と言うのは、その王の支配する範囲を意味しました。そこから、ここでの意味は、具体的な終末による神の王国の到来と共に、神様の支配が、世界を覆いますように、という祈りです。

では、何のためかと言いますと、それこそが第3の祈りである、

「御心が行われますように、

天におけるように地の上にも」

が実現する為です。人間の歴史は、有史以来、神様の支配、御心を拒み続け、人間が神の座に坐って、弱い者を支配し続けて来ました。そこから生まれたものは、敵意、争い、憎しみです。世界は、抑止力の名の下に、自分の国が被害者にならない為との考えから、軍備増強の

道を、どの国も競い合って来ました。今日の核兵器、科学兵器の所有は、人間が所有者であり、支配者である限り、不測の事態が起こらないとも限りません。神様の力強い御手の下に自らを低くして、神様の支配、御心に服することなくして、人類に明日の保証はありません。

新聖歌464番に、

“汚れと争いは いつの世にか消ゆらん
平和の君イエスの 来たり給うまで絶えじ
主よ疾く来りて 世界を治め給え
御民は忍びて 御世を待てり”

とある通りです。神様はイエス・キリストを信じて、ご自身の支配と御心を受け入れる人が、一人でも増えるように、世界の終結を待っておられるのです。私たちは、

『イエス・キリストを信じる人が増えて、神様の御支配と御心が広がると共に、キリストの平和が実現する、神の国の到来を心から願い、御国が来ます様に、御心が行われますように、天におけるように、地の上にも』

との祈りを一層篤く祈らなければなりません。

4番目の祈りは、私達の為の祈りに変わります。イエス様は、私達の為の祈りの最初に、11節の

「わたしたちに必要な糧を
今日与えてください」

と祈るように教えられました。当時イエス様の許に集まって来た人々は、その殆どが、日雇いで雇われていた、その日暮らしの貧しい人々でした。毎日仕事があるとは限りません。今日仕事が無ければ、家族はお腹を空かせ、辛い思いをします。病気や身体が不自由であれば尚更のことです。イエス様は本当に愛の深い方です。そのように生きて行く為の痛みを思いやって、肉体の必要のために、

「必要な糧を今日与えてください」

と、私達の為の祈りの冒頭に、そのことを祈る事を教えられました。かの、時代に比べ、私達は今日、周りに食物は溢れ、食品ロスを如何に少なくするかが、呼び掛けられています。その一方で、コロナ禍のために、仕事を失い、今日の食べ物に困窮しておられる方々がおられます。テレビでは、難民キャンプの人々に、食糧が不

足している事が伝えられています。私たちの問題は、それらのことを、どのくらい自分の痛みとして引き受けられるかどうかということです。

「御国が来ます様に」

「御心が成りますように」

と祈るからには、私たちは、

「私たちに必要な糧を今日あたえて下さい」

と祈る時に、

『私たち』

と祈る私たちの中に、今日食えることに困窮して居る人々に思いを馳せ、そのために支援をして行く事を当然のことと思うべきです。コロナ献金や、国際飢餓対策献金が身近に出来るのですから、その事に心がけて行きましょう。

5番目の祈りは

「わたしたちの負い目を赦してください。
わたしたちも自分に負い目の有る人を
赦しましたように」

です。ここで、

「わたしたちも自分に負い目の有る人を
赦しましたように」

と言うのは、罪深い人間が、そんな事を神様に祈るのは、不遜の様に思われます。しかし、ここで言わんとしている事は、人間自身には、人を赦す力はないことが前提になっています。私たちというのは、あの、マタイ18章の、

『1万タラントを王様に赦して貰った家来が、仲間に貸した100デナリオン、それは自分が赦して貰った額の60万分の1でしか無いにも拘わらず、それが赦せなかった、あの家来と同じです。』

しかし、私たちは、自分に罪する者を許すこと無しに、神様に、

「自分の罪だけを赦して下さい」

と言う事は出来ないのです。この自覚が有るかどうかです。神様の赦しの愛が、心に篤く溢れ、神様の力によって、相手を赦す事が出来ます。赦す力の無い人間には、それ以外に方法はありません。この事についてイエス様は、14節、15節で、

「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」

とはっきり言っておられます。

「わたしたちも赦しましたように」

と祈る時は常に、自分が神様に赦された罪の60万分の1でしかない事を思い、遜って(へりくだって)そのように祈りましょう。

最後は

「私たちが誘惑に遭わず、
悪い者から救ってください」

です。罪が闊歩するこの地上の旅路は、罪の誘惑と、悪魔からの攻撃に満ちています。天を見上げ、神様の守りと、助け無くして歩み抜いて行くことは出来ません。私たちはその事を日々自覚して、主の祈りを祈り続ける必要があります。朝目覚めると共に、昼働きの中で、夜床に就く時に、機会ある毎に、主の祈りを祈りつつ、天の御国を目指して、この世の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

罪深い私たちが愛して下さる天の父なる神様

イエス様を通して、主の祈りをお与えくださり、有難うございます。主の祈りをもって、地上の旅路を歩み抜かせて下さい。

イエス様のお名前によってお祈りを致します。

主の祈りを、いのりましょう。

天にまします我等の父よ、
願わくは御名を崇めさせたまえ。

御国を来たさせたまえ。

御心の天になる如く地にもなさせ給え。

我等の日用の糧を、今日も与え給え。

我等に罪を犯す者を、我等が赦す如く、

我等の罪をも赦し給え。

我等を試みに遭わせず、悪より救いだし給え。

国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり。

アーメン。